
ウ(主人公)とその幼馴染と微妙に愉快的な赤の他人達はマジックマッシュルームを使用シマシタ。

(`@盆@`)

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユウ（主人公）とその幼馴染と微妙に愉快的な赤の他人達はマジックマッシュルームを使用シマシタ。

【Nコード】

N2170U

【作者名】

(・@盆@)

【あらすじ】

ユウは今まで遊んでいたゲーム《クリスタルオンライン》の中に入り込んでしまった。様々な魔法や剣のスキルが入り混じる閉鎖空間に閉じ込められたプレイヤーの行く末は……？ 何処か抜けている幼馴染の安瀬と、過去に何かを抱えるユウ。それに様々な人間が入り混じって、物語は徐々に進行していく。何も分からない場所、自前の知識と性格とパラメータを駆使して何とかやっていく物語です。MMORPGトリップです。必ず前書きを読んでください。

61

前書き

本作品はMMORPGトリップを題材にした作品です。流行のVR MMORPGとは異なるので悪しからず。

また、プロット無しの行き当たりばったりの作品なので、話のクオリティや物語の雰囲気にもムラがあります。作者は飽きやすい性格ですので、最後まで続かない可能性もありますが少し本腰を入れてやるつもりです。

また、この作品には以下の表現が用いられる可能性があります。

- ・流血表現
- ・人を馬鹿にするような不快な表現
- ・少々の性表現
- ・俺TUEEEEEEE要素（未定）
- ・ハーレム要素

また、作者はプロではありません。書籍のような作品を求める方は、この作品を読んで落胆するかと思われます。

ただ、もし開いてくれるのならば少しでもいいので読んで欲しいです。

無理には言いません。

しかし、多くの方に僕の作品を読んでもらいたい。その一心で書いていることは確かです。

長くなりました。

次話から本編となります。

不定期更新で、文字数もまちまちですが、宜しければどうぞお付き合い下さい。

ユウ（主人公）とその幼馴染と微妙に愉快的赤の他人達はマジックマッシュユール

2chの皆の優しさを忘れません

ユウ（主人公）とその幼馴染と微妙に愉快な赤の他人達はマジックマッシュルーム

気が付いたらゲームの中に居た。

そんな夢の様な、御伽噺のような事を一度は考えたことがあるのではないだろうか。全ての理を逸脱してあえてその外れた道を選択する。一見、ただの無謀な事にも思えるがそれは実に身近な感情なのだ。幼い頃にテレビで見たヒーローの真似をして『変身！』だなんて格好つけたことはないだろうか。それも、『あんな悪い敵をやっつけて、ヒーローになりたい』そんな心が関係しているのだと思う。

理を逸脱してしまえば、当然不可解な出来事に多々遭遇するわけであって。夢のような事が、実際起こり得る可能性も無いとは言い切れない。

なぜならば、世界そのものが不可解である事に変わりはないからだ。

一体、人間が知っている情報はこの世界の情報量の何%に匹敵するのだろうか。自分では物知りな方だと思っている人もいるかもしれない。

間違っではない。本当に保有している情報量が多く、周りからも認められるならばそれは物知りとも言えるだろう。

だがしかし。それは世界の情報量の中で人間が知っている数少な

い情報の中の、更に少ない情報でしかないのだ。世界に比べれば見劣りしてしまう。というか、比較対象にもならない。

そう、だから。

実際に、ゲームの中に入ってしまったても一概にそれは不可解とは言い切れないのだ。

ユウは、ついさっきまでプレイしていたはずのオンラインゲーム《クリスタルオンライン》の中央都市《東京》にいた。いたというのは、仮想空間に存在するアバターがという事ではない。自分自身つまり本来ならば操作する側の、その機体の前にいるはずの本体がいるということだ。

数十分前までは、パソコンの前でマウスとキーボードを叩いていたはずのユウはこの状況を理解できずにポカーンと立ち尽くしていた。

(は？ 一体、どういふこと?)

周りを見渡せば同じように、多くの人がユウと同じようにその光

景に唾然としていた。今までは2Dのグラフィックだったのだが突然、3Dとなったのだ。その驚きを隠せないのも無理は無いだろう。しかも、その人々には全員、アバターのようなHPバーやMPバーがその頭上の上に浮いている。

ユウは少し動揺しながらも更によく辺りを見回す。やはり、ここは間違いなく《クリスタルオンライン》の中央都市《東京》で間違いないはずだった。見間違うはずは無い。立体感やリアリティこそ違うものの、それはユウは少し前まで熱中していたゲームの、いわばこのゲームを遊ぶうえでの基点となる場所で間違いは無かった。

グーパーグーパーと手を開いたり固く閉じたりする。軽く歩いてみる。自分が立っている石畳の地面を足でコツコツと叩いてみる。

その感触や手触り、音や造りなどその全てがユウが体験してきたものと全くもって一致する。

(とすると、やっぱりここは《クリスタルオンライン》だよな……
?)

そこで、初めてユウは自分の体に異変があるのに気づいたのだがこれはユウの身体ではない。明らかに痩せ過ぎだろうと思えるほどの細さに、それでいてしなやかに程よくついている筋肉。髪は右側だけが左よりも長くなっていて、その部分は紫色に染められている。前髪を上目遣いで見ると、それは赤茶色をしていた。どう考えても、健全な男子高校生の髪ではない。

しかし、ユウはこの髪の色に覚えがあった。

そう、これは。

(ゲームの中のアバターの姿になっているのか!?)

確かにこの髪の色はアバターであるユウの髪の色だった。

このゲームのキャラクターメイクシステムはかなりのレベルの高さだ。普通、キャラクターメイクといえば最初から決められているパーツを好きなように組み合わせ、何パターンかのアバターを作るといったものだった。

しかし、このゲームは全くといってもいいほどに違う。大まかな骨格の作りは最初から用意してある、パーツから選ぶのだが顔や服装、髪の色等。

そういったものは全て自分で決めることが出来るのだ。例えば、目だったら基本となる丸い目を画像処理をすることで、切れ長にしたり、あるいはタレ目にしたりと自由自在。髪の長さ、目の色、髪の色その他もほとんど同じようなやりかただ。

つまり、多少被るかもしれないがほとんどオリジナルのアバターが完成するわけである。

(しかし……ゲームの中に入るって何処のライトノベル?)

ユウは恐らくはプログラムで構成されているであろう、自分の身体をゆっくりと見やる。確かな触感や、あの機械特有のカクカクとした感じが全く感じられないきめ細やかで、柔らかな肢体。

まるで、完璧な人間を見ているようだった。

周りには、見覚えのあるプレイヤー達が同じようにこの状況に啞然としていた。

《クリスタルオンライン》は会員数一億人。勿論、日本だけの数字ではないのだが、日本の人口に匹敵するほどの会員数を有する。世界最大と言ってもおかしくはない、超巨大オンラインゲームだ。サーバー数は実に三十ほど。運営は、ゲーム業界では御馴染みといっても良い《レッドデヴァイス社》。数々の名作を生み出した、この会社史上最大のヒットと言われているのがこのゲームだ。

高いグラフィック性能。スペックの低いパソコンでも快適に動作出来るように、無駄な部分は全て省いている。また、徹底的なシス

テム管理能力。大抵のオンラインゲームの欠点といえば、それはゲーム自体ではなく、それを運営する管理側だ。

より良いゲームを、より面白い発想をそういった事に頭がいきすぎて、肝心の公開後の対処を度外視してしまっているのである。ユーザーが望んだゲームが出来たとしても、それが無法地帯であればその楽しさは半減どころかつまらなくなってしまう。

例えば、チートを使っているユーザーがいたのにも関わらず運営がそれを放置すればどうなるだろうか。当然、ユーザーは不快に思うだろうし運営に何かしらのアクションを起こすように問い合わせるだろう。しかし、それでもし運営が明確な対処をしなければ。ユーザーは離れていき、ゲームは廃れる。折角のゲームも管理が行き届いていないと、糞ゲーと呼ばれる類に仲間入りしてしまうのだ。

そういった点でもこのゲームは優れていた。迅速な対応、二四時間受付の問い合わせ。更には、バグが見つかれば即刻修正。ゲームを盛り上げるための機能の追加、つまりはアップデートもほぼ毎週欠かさずに行っている。

管理システムもハッキングされる確立は〇に等しい。管理システムに入るのには、合計一〇のセキュリティシステムを解かなければならないのであり、プロのハッカーでも絶対に無理だと言われている。

では、この状況は一体何なのだろうか。

(管理システムへのハッキングはあり得ない。しかも、ハッキング出来たとしてもこのゲームは俗に言う《VR》ではないのだ。こんな状況に陥るはずは無い。ってことは、あり得ないけど。ファンタジーすぎるけどやっぱり、ここはゲームの中の世界って事か……?)

一人で考えていても埒が明かない。そう思ったユウは咄嗟に通信機能を思い出した。

このゲームでは交流を深めるために、フレンドになった他のプレイヤーといつでも連絡を取り合うことが出来るようになっていた。ユウはソロプレイヤーとしてこのゲームを楽しんできたので、フレンドと呼べる仲間ほとんどと言っても良いほどにいないのだが、唯一ユウとパーティを組んだりしたりしてプレイした事のある、プレイヤーがいた。

それはユウの目の前でワタワタと動いている女性プレイヤーだ。ロングの黒髪に、大人しそうな印象を感じさせる、黒縁の眼鏡。薄い唇に大きな目。そして、やはりゲームのキャラクター特有の整ったといった感じだろうか。

「安瀬^{アゼ}」

ユウが声をかけると、安瀬と呼ばれた女性プレイヤーが「あわあ

わ」と発しながら、文字通り目をぐるぐるに回しながらこっちを向いた。

「ユウ……ユウくん？」

目をつるつるとさせながら安瀬が、抱きつかんばかりに飛び掛ってきた。微かにコロンの香りがする。ゲームをやっている時に、コロンの香りが漂ってきたらどう考えても、隣人の仕業なのだがゲームの中にいるらしい現在では、これは安瀬から発せられる匂いらしい。

(……ゲームの中には一応嗅覚っていうのがあるらしいな)

人間は五感　つまりは、視覚、味覚、聴覚、嗅覚、触覚を司る器官によって初めて、何かをする事が出来る。さつきからひっそりと実験していたのだが、今ユウには視覚、聴覚、嗅覚、触覚の四つが存在している事が分かっていった。残る一つは味覚だけなのだが、ここまで完璧に再現しているのであればこれが存在している事もほぼ確定だった。

「安瀬、良かったよ。お前とログインしておいて。流石に一人でこの状況进行处理するには無理があるからな」

ユウが安瀬の肩に手を置いて話し出した。ユウのこのゲームの中の数少ないフレンドであり、また現実での付き合いも最も長いのがこの安瀬だった。

彼女の本名は、安瀬^{アゼ}神楽^{カグラ}。ユウの幼馴染であり、学校の同級生でもあった。昔から親同士での交流があったし、家も近かったため幼少期はよく一緒に遊んでいたのだ。今では、互いに他の友達も出来たし、何よりも異性を意識し始める時期なので二人で遊ぶということとはほとんど無かった。

しかし、この《クリスタルオンライン》で偶々出会った事からこのゲームでよく遊ぶようになっていた。安瀬はクラスでもあまり目立たないタイプで、このゲームキャラを幼くしたような感じだった。ユウが昔聞いた友達の話では、安瀬は「隠れ美人」らしい。

「私と一緒によかった……」

安瀬が何か独り言を呟いて、ユウには顔が若干ニヤけている気がした。

「……安瀬？」

「うえっ!?!」

「よくもまあ、この非常事態に妄想に浸ってられるな」

ユウは呆れ気味に腰に手を当てた。そして、安瀬にも一応聞いてみることにした。

「俺達はどうかやら、ゲームの中に入ったみたいなんだけど何か分かることはあるか？」

現実では安瀬はかなり小柄でユウとの身長差がかなりあるから、安瀬が上を向くかユウが下を向くかしなければいけないのだが、このゲームではキャラクターの姿になってはおかげでさほどその身長に変わりはない。ユウはついいつもの癖で下を向いてしまったが、そこにあるのが地面だけだったのであわてて正面を向いた。

「ほえ。やっぱりここは《クリスタルオンライン》の中なんだね……。私にはわかんないよ、ユウ君だけが頼りだから」

「うーん、やっぱり安瀬じゃ分からないか」

「あぐっ……。馬鹿にされてる気がする」

(とすると、やっぱり思い当たる節となればあれしかないよなあ)

ユウには一つだけ、この状況に陥ってしまった原因の心当たりがあった。余りにもタイミングが良すぎたのでまさかとは思っていたのだが、この他に原因が見当たらないとなると、やはりこれが一番有力だと思えた。

と。

ユウ達がこのゲームの世界に入ってしまうほんの少し前のこ

ユウ（主人公）とその幼馴染と微妙に愉快的な赤の他人達はマジックマッシュユル

ユウ達がこのゲームの世界に入ってしまうほんの少し前のこと。

普段通りにユウは《クリスタルオンライン》をプレイしていた。平日は学校のある昼間以外はほとんどログイン。土日はバイトの時間以外はほぼログインしていた。つまりは、ほとんどの時間をこのゲームに注ぎ込んできたわけだ。

今日も、ユウは普段通りにこのゲームをプレイしていた。勿論、ソロプレイだ。《東京》のアイテムショップで冒険をする時に必要になる回復薬や、リタイアしそうな戻ってもすぐに戻ってこれるような道具を買っていたのだ。

商人NPCとの会話を素早く済ませて、ユウは《東京》を後にしようとした。

その時だった。

アイコン

という音と、アイコンの点滅でユウはその動きを止めた。点滅しているアイコンは《メール》だ。他のプレイヤーに手紙を出したり、

受け取ったり。又は、クエストを受ける際にNPCから依頼詳細が送られてきたりするのである。

（あれ？ 俺なんかクエスト受けてたっけなあ……）

そう思いつつも、ユウがメールアイコンをクリックして受信BOXを開く。そこには、『運営より』という件名のメールがポツンと入っていた。ユウはメールBOXは毎日チェックしているので、大抵どんなメールが来るのか分かっていたのだが、これは予想外だった。

今までに来ていたのはソロプレイヤーであるユウに対しての部隊からの勧誘メールや、安瀬からの日常的な会話程度のメール。それに、これは人にも選べるのだが商店NPCからのメールだ。これは、商人NPCに話しかけて、ある操作をする事でメルマガを受け取ることが出来るというシステムだ。これを取っておけば、アイテムの最新入荷情報が分かる他、メルマガ受信者限定のアイテムを買うことが出来るようになったりする事もある。

裏技というか、隠し要素のようなものだ。

しかし、今回は運営からのメールだった。アップデート情報等は全て新規登録時に指定した、パソコンのメールアドレスにくるはずだ。わざわざ、運営からゲーム内でのメールがくることは今までに

一度も無かった。

(何かイベントか?)

ユウは運営からのメールを開いた。文章が表示されるのと、視界が一瞬にして光に埋め尽くされるのは、ほぼ同時といっても良かった。思考が完全に止まりそうになる、いきなり目の前で繰り広げられる超常現象にあっけに取られる。しかし、そんな事を考える暇も無いまま。

気が付いたときにはもう既に、この《東京》に来ていた。

《クリスタルオンライン》はゲーマーやネットでは《水晶》という通称が最もメジャーだ。その語源の由来は、安易にこのゲームの名前ということもある。クリスタルだから水晶。誰が一番初めにつけたのか知らないが、今では公式にゲーム側もこの略称を使用していた。

《水晶》は、剣と魔法が交差するファンタジーな日本を題材にし

たゲームだ。故に、ほとんどの街の名前は実在の名称であったり、またそっくりそのままの外観となっている。単純に考えれば、実際に住んでいる日本で民間人がすれ違いざまに魔法を使っていると考えばいい。

様々なやり込み要素があり、ジョブの数はおよそ百、スキルの数はその十倍の千。といっても、これは今現在調べ上げられている限りなので、実際はもっとあるのかもしれない。

レベルは存在しているしパラメータも勿論あるのだが、それよりも寧ろスキルを組み合わせることで強さが決まってくる。それがこのゲームの人気の利点でもある。レベルやパラメータだけに囚われない面白さがあるのだ。

例えレベル差があっても、スキルの組み合わせ方やジョブの相性、プレイヤー自信のテクニクや知識量も問われてくる。つまりは、単純にレベルを上げれば強くなる比例の関係の時代はもう終わり、これからは数字に作用されない部分が重要視されてくる。

そんなゲームの代表格がこの《水晶》だ。

「安瀬、ちょっと俺に魔法かけてくれるか？ 攻撃魔法よりも、能力増加系のやつをかけてくれ。本当は俺が自分でやりたいんだが、俺のジョブはそういうことは専門外だからな」

ユウは、暫く経って落ち着いてきた安瀬に能力増加の魔法をかけて欲しいと促した。こんな現象が起きているのだ。仮にも、これが夢では無いことは確かなのでもしかしたら魔法も使えるのかも知れない。いや、実際使えるだろう。

軽く流してしまったが、さっきは通信機能も使えたのだ。具体的にどうやったと聞かれても、上手く説明は出来ないのだが、それとなくイメージする事で使うことが出来た。とすれば、同じようにすれば魔法も使えるし、道具も使うことが出来るはずだ。

(ちよつと安瀬は心配だけど、まあ仕方ないか)

「あ、うん。でも本当に使えるのかなあ？」

「さあな。分かんないから検証するんだろ。ただ、俺の推測では使える、と思う。俺の通信で呼んでお前が応じたって事はお前も、一応通信機能使えたんだろ？ 同じ要領でやれば魔法だって、ソードスキルも道具も全部ゲームのように使えるはずなんだ」

「そうなのかなあ……。あ、でもそんなことしていいの？ 私達、ゲームの中に閉じ込められてるんだよ？ ほら、あの人達とっても焦ってる」

そういつて、安瀬が指差した方向には男性プレイヤー三人組の姿があった。三人ともに、ユウ達ほど現実を受け止めていられないのか、あたふたと慌てたりはたまた、言い争いをしたり、何か助けを呼ぶようなことを言ったり。まるで、この状況が夢だとも思っているようだ。

「そんなもの俺の知った事じゃあない。もし、助けがくるなら時間が解決してくれるさ。だからといって、何もしないでその助けを待つのは馬鹿な奴らのすることだ。今自分が置かれている立場を、すぐに理解して行動に移すことができる奴だけが、成功するんだよ」

「でも、やっぱりおかしいよ。いきなり、こんなことになるなんて……」

なおもグダグダと言う安瀬にユウは、一気に畳み掛けた。安瀬の肩をがっしりと掴み、その黒色の目を正面からジッと覗き込む。

すると、安瀬は急にカアツと赤くなり目をグルグルと回転させる。

「はうあつ」

「頼む、安瀬。お前にしか出来ないんだ。いいか、俺達はこの不可解な状況に陥ってしまった。これから起こることを予測することは出来ないんだ。常に一番最悪のパターンを予測しておいて、手を打たなければならぬ。今一番危険なのは、この世界のことを知らないということだ。もしも、ここから出られなくなったときに、生きていく為に必要な情報は全て知っておかなければならない」

ユウは何故か混乱している安瀬にもう一度、言っておいた。すると、安瀬はコクコクとまるで機械のように首肯して、自分の肩を掴んでいるユウの腕を、ぎゅっと掴んだ。

「こうかな……。《アップアタック》」

安瀬がそう呟いた瞬間にライトエフェクトがその手を装飾し始めた。文字列がライトエフェクトとともに浮かんでは消え、消えては浮かんだ。

「凄いな……」

思わずユウが感嘆の声を漏らした。

「とっても綺麗だね」

しかし、その光もすぐに消えてしまった。

(これで、魔法は終了ってことか。確かに、魔法は使えるようだ。安瀬が使った《アップアタック》は味方一人のATKを一・五倍にするスキルだったよな。ってことは、俺のATKが上がってるはずなんだ。この調子でやっていけば、恐らく全てのスキルが俺達がやっていたゲームのように扱える)

そこで一つ、ユウは自分一度でいいからやってみたかった事を試してみることにした。心の中でくすぶり続けていた、幼心。

頭の中でコマンドをイメージし、操作する。すると、たちまちメインウィンドウが脳内映像に表示されていく。その間は高速と言っても良い速度だ。的確にスキルウィンドウにする。イメージがどんどん沸きあがっていった。

(……よし、これで)

「《グレネリア》」

ゴウツ。

炎の柱が安瀬を包んでいく。比較的早い段階でも覚えられる魔法の一つだ。威力も低レベルで覚える中ではそこそこに高く、使い勝手も良い。

「熱い！ 死んじゃう!?!」

前から憧れていた。自由自在に魔法をあやつる自分の姿が、今ここに。炎の柱はどういう構造になっているのかは知らないが、熱もちゃんと持っているようだ。

しかし、それも暫くするとやはり消えてしまうようだ。安瀬を包んでいた炎は次第にその威力を弱めていき、やがては消沈した。

安瀬が涙目でユウを見つめる。

「……………」

「……………」

「うん。まあ、魔法が使えるかどうかの実験はとりあえず成功って事で」

「Sだ！ ユウ君はDSなんだあ！」

わきゅーっといった様子で安瀬が手を振り回した。その姿はまるで子供のようだった。流れ行く時間の中でユウが初めて知ったときから取り残されたように。はしゃぐ安瀬の姿を見て、ユウは思わず苦笑いをする。

（俺も、あのコトさえ無ければこんな風になっていたのかなあ）

うつかり、記憶の紐を緩めそうになる。ユウは慌ててその思考の海から脱出した。これ以上、思考に埋めてしまったらまた壊れてしまふ気がするからだ。

「ほら、とにかくここにいても仕様が無い。それに、さっきも言ったけどこの状況下では常に最悪のケースを想像しなければならない。俺が予想する最悪のケースが起きる前にこの場を移動して、なるべくプレイヤー人数の少ない場所に移動したいんだ。……そうだな。モンスターが強いからあまり人が来ない廃棄物の終点」

ウェイストポイント
にするか」

「えと、ユウ君の意図は良く分からないけど、単純に人が少ない場所ってことなら廃棄物の終点よりも《鳥取》の何処かのほうが良くないかな？」

「《鳥取》か。正直、あそこに行くのは気が進まないんだけどなあ」

「でも、このゲームの人口の比率って実際の人口の比率とほぼ同じなんだよね。だから、現実で人口の少ない鳥取県は必然的にプレイヤーも少ないんじゃないかな？ それに、廃棄物の終点は人が少ないけどその分モンスターが強力だからあまり長時間入れないし……」

このゲームでは実際の世界と全く同じように作られていて、当然県も分かれている。プレイヤーは自分のいる県からスタートするのだが、ワープ機能を使って他県に行くことが出来るのだ。

人数が集まる県ほど、どんどんアップグレードで新機能が増えていく。だから、《東京》はゲームの中でも最大の都市となっている。

それと同じ要領で主要都市は大体、最新の設備が組み込まれているのだが、その反面過疎化が進む地域では更に人の集まりが悪い。

故に、鳥取や島根の辺りは最も人口が少ない。しかし、これはユウが個人で見つけたのだがこのゲームには隠し機能が密かに搭載されている。

様々な種類があるのだが、最もオーソドックスなものでいえば《岐阜》の経験地一・三倍増しだろう。そこまで隠し要素の中では良いものではないのだが、それでも知らないのと知っているのでは大分成長具合が違っだろう。

ちなみに、この隠し要素を発動させるにはそれぞれ発動させる条件があるのでその場所に行けば勝手に発動するというわけではない。

「いや、でもなあ……」

やはりユウはあまり気が進まないとも言っ様に、大袈裟に顔をしかめる。ユウにしては珍しく露骨に感情を表現するので、流石に安瀬も感ったのか急に眉を顰める。

「何でそんなに嫌がるの？」

「いや、まあ色々あってだなあ……。まあ、だけどこんな一大事にはそんな事言っられないか。あわよくば、アイツがこれに巻き込まれていませんように。」

祈るようにしてユウが目を瞑った。

「？ それじゃあ、行くの？」

安瀬のその問いかけにユウは覚悟を決めたように真っ直ぐ前を向く。

「ああ。行くさ。大体、都合よくアイツがログインしてるわけがないよな」

ユウは一抹の不安を胸に、せこせことワープをするために《東京》の片隅に移動していくのであった。

ユウ（主人公）とその幼馴染と微妙に愉快的赤の他人達は擬似ホタルに包まれ

《東京》には様々な地方からのプレイヤーが集まっている。アツブデートがされる常に時代の先をいつているこの都市の人口はおよそ一万にも及んだ。これは四七都道府県でも群を抜いて一位である。とても精巧に作られており、オタクの聖地とも呼ばれている《秋葉原》は勿論の事、ファッションの先駆けともいえる《原宿》もしっかりと存在する。

ちなみに、《秋葉原》ではフィギュアが買えるし、《原宿》では好きな服を買ってそれを自分のキャラに着せることも出来る。といっても、そんなものは一部の富豪プレイヤーだけで装備的な価値が無い服をほとんどのプレイヤーはわざわざ買おうとはしなかった。

ユウ達は様々な服が売られているショッピングモールを通り抜けると、転送装置の置かれている《コアエリア》に到着した。

この転送装置を使うことでプレイヤーは様々な場所に移動する事が出来るのだ。《コアエリア》はその転送装置が置かれている場所を示しており、この辺り一帯は戦闘がおこなえなかったり、モンスターが出現しなかったり。

所謂、お話広場の様な状態になっている。ユウ同様、普通にプレイしていたプレイヤー達もこんなことが起こるなんて全く考えずに、暢気に雑談をしていたのだろう。

まだ起こっている状況が飲み込めてないという様子だ。ざつと一〇〇人ほどだろうか。いつもよりは若干少ないといった感じだ。それでも、過密している事に変わりはない。皆一様に身体を見回したりしている。その辺りからもう既にユウは苛立ちを感じていた。

(何で皆こんな暢気なんだ？ どうして、この状況にもっと危機感を持たないんだ！)

そもそも、こんな事態に陥っているのに何故皆して騒ぎださないのか。

答えは既にユウの頭の中にあつた。

希望を持っているから。最悪を目にした事が無いから。現実を直視出来ていないから。

あの頃の自分のように。

しかし、そんな事をこのプレイヤー達に言ってもあまり意味は無い。ユウは安瀬を連れてさっさと転送装置の前に向かった。

「ユウ君、この人は皆落ち着いてるね。怖くないのかな？」

「馬鹿なだけだ」

ユウは吐き捨てるように言った。光の柱のようにして存在している転送装置を目の前にして安瀬のほうへクルッと振り向く。

「どっしたの？」

首を傾げる安瀬にユウは言い放った。

「これから起こることは全て現実だと俺は認識してる。何もかもが夢ではなくリアルだと。いいか、絶対に迂闊な真似はするな。常に俺の傍にいる。今までのゲームという認識は全て捨て去って、これを俺達の世界だと思っんだ」

「うーん、分かった？」

疑問系で頷く安瀬。本当に分かっているのかは甚だ怪しかったが、これ以上ここで時間を食うのもあれなので、ユウは手早く転送装置の中に入る。

(タイムリミットは二時間。その間に、とにかく人気の無い場所に行かないとな……)

行き先を《鳥取》に設定してワープを選択する。すると、光が安瀬とユウの身体をすぐに包み込んだ。眩いばかりの光に思わず目が眩んでしまう。

「うわあ、とっても綺麗だね。蛍が一〇〇〇〇匹飛び交ってるみたい」

「地味に気持ちの悪い発想するなよ……」

ユウが思わず突っ込むと、安瀬は「そうかなあ」と不満げに呟く。自然と戯れるのが大好きな安瀬とは対照的に、昔からユウは虫が嫌いだった。クモ然り、ハチもまた然り。拳句の果てには耳元で飛んでいる蚊の羽の羽ばたく音が気持ち悪くて吐いたほどだった。

その中でも特に嫌いな虫は最早嫌われ者の代名詞とも言われているゴキブリ。カサカサと動くそのグロテスクなものを見ただけでも身の毛がよだつ。

昔は泣いて母親に抱きついたものだが、今はもう既にそんなことは無い。

(涙が出てくる程度だ。ゴキブリの気持ち悪さには反吐が出る)

当然といえば当然なのだが、そのゴキブリに容姿の似ている蛍もユウは大嫌いだった。

光の粒子で構成された壁が視界を遮る。ユウはゆっくりと目を閉じた。とても直視出来る光景ではなかった。安瀬がどうしているのかは、知らないが昔から自分で何かをすることは苦手でもいつもユウの真似をしていたので、恐らくは目を瞑っているのだろう。

瞼の外から眼球に光が差し入ってくるが、それも一瞬のことですぐに居心地の良い黒に変わった。

うつすらと目を明けると、真昼の陽光がユウの目を貫いた。

「成程な。ゲームの中にはご丁寧に天気まであるのか。しかも、何処も統一されているわけではなく、気温にも整合性が無い」

「本当だね。《東京》は少し曇っていたのに、ここはとっても晴れるよ」

「まるで、本物の世界だ」

ユウは頂垂れるようにして頭を捻る。どう考えてみても、魔法が使えたりパラメータが存在するという事以外は本物の世界と変わっていない。

何も変わっていない。

その事実にある種の安心感と安堵感を覚えると同時に、最悪のシミュレーションもユウの頭の片隅には既に置いてあった。これは、ここにきて全ての感覚が機能した時から薄々感じていたものだった。もしも、本当にこの世界が『ゲームを模した現実』であるならば確実に。

確実に、『死』は存在するということ。常に数値化されている不安定な寿命を守り続けなければならぬ。それはある意味で、現実よりも過酷と言えよう。

「やっぱり早めに移動しておいて良かった。俺の予想した最悪のケースは絶対に起こる。これは断言出来る。一応、ここは人口が少な

いから《東京》よりも幾分マシだけど、それでも警戒するに越したことは無いからな。気は進まないけど、弓狐キウコのどこにいくか」

「弓弧？ 誰、それ」

安瀬が初めてユウの口から出た人の名前に反応した。名前からしても、恐らくは自分と同じ女性プレイヤーだろう。

(うー、仲良かったら嫌だなあ……)

安瀬は心の中で今からでも違ふところに行けないかな等と考えたが、それも無理だということに気づき、諦めた。何せ、ここに来ようと提案したのはほぼ安瀬のようなものだ。数十分前の自分を恨みつつ、ユウの口から出る言葉を待つ。

「そうだなあ。まあ、簡単に言えばここの領主なんだけど」

「領主!？」

その言葉に安瀬は愕然とした。

領主といえば、それぞれの県のトップ。いわばその地方を統制する知事のようなものだ。当然、それ相応の実力が無ければならないし、投票で支持を得られるほどの絶大な人気が無ければならない。そんな人とユウは知り合いなのだ。

「ユウ君、領主さんと知り合いだなんて……。初めて知ったよ。でも、どうして？ ネットのお友達？ 《東京》の領主さんとなら私

面識あるけど。他県の、それも《鳥取》だなんて、一体どういう知り合いなの?」

「んーまあ、偶々つてやつかな。俺がソロプレイしてる時に偶然その人がやられそうになったのを助けたんだよね。どうやら、エリアボスらしくて俺が割って入って倒しちゃったから経験地と報酬が半分になったとかなんとかで文句付けられたんだよ。でも、その後俺が謝りに行ってその時貰った報酬とお金を渡したら、機嫌直してくれてさ」

「何その人、感じ悪いね！折角ユウ君が助けてあげたのに逆に因縁つけて報酬をふんだくるなんて！何でそんな人に渡しちゃったの?」

「まあ、なんつうか」

そこでユウは一瞬笑顔になったあと。

「可愛かったから?」

バチンという平手打ちの音が快晴の空に響き渡った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2170u/>

ユウ(主人公)とその幼馴染と微妙に愉快的な赤の他人達はマジックマッシュル

2011年6月22日15時34分発行